OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	カタロニア語の関係詞について（２）
Author(s)	長谷川, 信弥
Citation	Estudios Hispánicos. 1998, 22, p. 37-48
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97937
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

カタロニア語の関係詞について(2)

長谷川　信弥

「カタロニア語の関係詞について(1)」目次

1. はじめに
2. 従来からの記述
   2. 1. que
   2. 2. qui, què
   2. 3. el qual (la qual, els quals, les quals)
   2. 4. on
3. 疑問詞 quin の関係詞としての誤用

本稿では、引き続きカタロニア語における関係詞の諸特徴の記述と、その中でもいくつかの関係詞に関しての口語的な振る舞い、特に規範からは逸脱していると考えられるにもかかわらず比較的頻度の高い用法の記述とその使用に対する諸研究者の見解と分析を紹介することによって、この言語の関係詞を概観していくことにする。そこでまず、拙稿(1996)に対する補足より始める。

4. 疑問詞 quin の関係詞としての誤用についての補足

例文(40)(=(34))のように、スペイン語の関係形容詞cuyoからの類推形として、quinを使用することは認めがたいとしてあげらているが、Solà(1972)も指摘しているように、隣接しカタロニア語に影響を及ぼしている言語の統語構造を検討すると、このquinの誤用へのひとつの説明が可能となるという。1)ここでは、すでに拙稿(1996)で簡単に紹介したこのSolà(1972: p. 119)の説明を詳しく見ていくことにする。

(40)És la casa quin propietari acaba de morir. (=(34))
(これは、その家主が亡くなったばかりの家です)

例文(40)では、quinは先行詞casa(女性名詞単数形)ではなく、次の名詞propietari(男性名詞単数形)に形態的に一致して男性単数形となっているが、これはスペイン語のcuyoと同じプロセスによる構造で、すでに述べたように、カタロニア語の本来的な構造ではなく、口語的な誤った表現であると批判されてきたものである。では、隣接する言語ではどうかというと、次のように、先行詞をA、関係形容詞を★、関係形容詞によって修飾された関係節内の名詞をN、その関係形容詞が形態上の一致の対象となる名詞の方向を→と←で示すとすると、ラテン語、スペイン語、英語、フランス語の構造は以下のように表すことができる：

a. ラテン語： A＋←★ ＋N
b. スペイン語： A＋ ★→＋N
c. フランス語： A＋ ★ ＋冠詞＋N
d. 英語： A＋ ★ ＋N

a. puer(i) cuius (quorum) mater....
b. niño(s) cuyo/cuya padre/madre....
c. enfant dont la(les) mère(s)....
d. child(ren) whose mother(s)....

これらの言語では、関係詞が例外なく関係節頭位にあり、節を導入する標識(補文標識)としていわば適正な位置にあって、それとしての機能を果たしていることがわかる。これに対して、カタロニア語では、★にあたる関係形容詞を欠くため、拙稿(1996)でも掲示したようにふたつある次の構造のどちらかをとらなければならない：

e. カタロニア語：1) A＋冠詞＋N＋<<de＋冠詞＋qual>>
2) A＋<<de＋冠詞＋qual>>＋動詞＋N [2)]

e. 1) nen(s) la mare del(s) qual(s)....

2) nen(s), del(s) qual(s) + 動詞 + la mare

2)のタイプの構造では、関係詞が冠詞を伴い節導入の標識としての機能を関係節頭位で果たし、関係節内の主語であるla mareは動詞(句)のあとに現われている。一方、問題となっている1)のタイプでは、関係詞が節導入の標識ではあるものの従属節の頭位にはない。これは、たとえば節導入の標識である接続詞の振る舞いとは異にするものである。カタロニア語の接続詞もスペイン語のそれ同様に、省略されることはほとんどなく、従属節の標識としてその頭位にあるので、1)のタイプの関係節は、他の従属節導入の標識と比較しても異質なものであると考えてよい。このように、カタロニア語に隣接し、語彙のみならず形態統語的にも影響を与えつづけているスペイン語や、それと同じタイプを示すフランス語や英語との比較においても、カタロニア語のこの構造は異質なものであり、quinのようなスペイン語cuyoからの類推形が出現する機会を与えるに十分な理由となっていると考えたい。また、1)のタイプの構造の出現に関しては、2)の構造を回避するためであると解釈すれば、関係詞が節導入の標識として節頭位にあり、機能上適切な位置を得ていると考えることができるが、del(s)が修飾する名詞が直前のnen(s)ではなく、la mareという統語的に離れた位置にあるのは安定性を欠いている。

またもうひとつ、この2)のタイプから観察されることは、例のようにnen(s) la mareがひとつの名詞句を形成せず、結果として別々の名詞句が動詞など他の文構成要素をはさまずに並列してしまっていることである。これもカタロニア語では統語的に成立のむずかしい構造を生み出していることになり、このこともこの構造が回避され、他の構造が出現する機会を与えやすくなっているのではないかと考えたい。

このように、いずれの理由をとってもこの構造の困難さが指摘されることになり、構造的により簡潔で容易な方向へ向かう傾向を示唆しているものと考えたい。またこれは、のちにqueの用法を検討する際にも述べるが、関係詞としての機能負担の問題として捉えて説明を試みることもできるのではないだろうか。つまり、関係詞として無標の位置であって機能的にも適切である関係節頭位に向かって移動したいという傾向は、関係詞としての機能のひとつである節導入の標識、つまり補文標識という役割そのもの

であるわけで、統語的にこの機能を果たすことのできる語の存在をカタロニア語に対して少なからず影響を与えている隣接言語、スペイン語から類推し、それを利用することは、そういった語を欠くこの言語にとっては好都合であるといえるのではないだろうか。またすでに述べたように、類推された語であるquinが、関係詞と同形である他の疑問詞のおかげで疑問詞から関係詞的な機能への移行が容易だったことも繰り返し強調しておきたい。

さらに、別の解決法としてqueを使ったものも見られ、これも誤用として批判されているが、これはqueの考察の際に見ることにする。

5. スペイン語lo queにあたるel que, allò que, això queについて

ここでは、Badia i Margarit(1995: pp. 362-363)の説明に沿ってスペイン語のlo queにあたる形式を見る。カタロニア語でこれにあたる形態としては、男性単数の定冠詞と関係詞との組み合わせによるel que、または指示詞allòやaixòと関係詞との組み合わせからなるallò queやaixò queをあてることが規範的とされている。[3]前者ふたつの形態による例文は次の(41)であるが、(42)はカタロニア語として認められうる形ではなく、いわゆるスペイン語法であると批判され、避けるべきだといわれているものである：

(41) El/Allò/Això que conta en Joan també em va passar a mi.
(42) *Lo que conta en Joan també em va passar a mi.
ジュアンの言っていることが私にも起こった。

これは、スペイン語法であることに加えて、人のみを先行詞として取ることのできる関係詞qui [4]が冠詞と組み合わせることができ、独立用法としてel quiという形態を用いる(43)が可能なことが、lo queを許すひとつの要因になっているが、これはまた口語レベルで次の(44)のように、el queとの交替が起こりうるためでもある：

(43) Ha arribat el qui faltava: ja hi som tots!
ひとり足りなかった人が来た、これで全員そろったぞ。

(44) Ha arribat el que faltava....

つまり、文語レベルでは、el/allò/això queがスペイン語のlo queに対応する形として、また人を先行詞とするまたは先行詞なしで人を言及する関係詞としてel quiという形式が対立して存在し、区別が明確にされているが、口語ではel quiがel queと混同され区別が明確でなくなり、その区別を確保するために、結果的にカタロニア語には存在しないにもかかわらず、その影響力の大きさから使用されてしまうスペイン語の形lo queを用いる結果となる。もちろんel queは先行詞の性・数に応じて変化するが、lo queに対応するものはel queのみである。しかし、el queは、先行詞が明確であれば、それが人の場合でも用いることができるので混同が起こるのである：

(45) Sóc la que busques.
私はあなたの探しているその人です。

(45)でqueは、関係節内の直接目的語となっているので、ここのquiを用いることはできずqueが義務的であるが、(44)のように主格ではquiとqueの交替が可能なために、その解釈の曖昧さを避ける意識がlo queの使用を許すことになると考えられる。ここでもスペイン語の影響が大きいこの言語のひとつの特徴が現れているといえる。

6. 関係節内の冗語的な弱形代名詞について

関係詞の誤用またはごく口語的な言い方で、少なくとも文語では認められない、または避けなければならないといわれている関係詞の用法のなかで指摘の多い表現が、関係詞そのものではないが、関係節内での弱形代名詞の重複である。Cuenca(1991)によれば、これには例文(46a)の分析的な構造(construcció analítica)と(46b)の冗語的な構造(construcció pleonàstica)とに分けることができ、規範的な構造は(46c)となるという：

(46a) Conec un paletaque li han donat un premi de poesia.
(46b) Conec un paleta a qui li han donat un premi de poesia.
(46c) Conec un paleta a qui han donat un premi de poesia. [5)]

私は、ある詩の賞を与えられた石工を知っている。

分析的な構造の(46a)では、queが関係節の導入標識としてのみ機能していて、節内のliが先行詞un paletaに前方照応して間接目的格の機能を負担している。つまり、本来的には関係詞が果たしているはずのふたつの役割、節導入の標識と節内の文構成要素としての機能をqueとliに分けて担っているのである。そのために分析的と呼ばれている。次の(46b)は、queではなくquiが用いられている点では、(46c)と同じく規範的でありquiが上述のふたつの役割を果たしていて、そのうえに余分なliが文構成要素としての間接目的格の機能を果たしていることになる。それゆえ冗語的と呼ばれている。queによる分析的な構造は次項で扱うことにして、他の関係詞の場合の冗語的な構造の例をあげる。各例文のアステリスクのついた語を取り去ると規範的な文となる：[6]

(47)Tornen a fer apuella pel. lícula que ja *l'hem vista tantes vegades.
(*l'hem → hem)
(私達が)もう何度も見たあの映画がまた上映される。

(48)La meva actuació, en la qual *hi podeu trobar defectes, és honesta.
私の振る舞いは、(あなたがたは)そこにいくつかの欠点を見出すかもしれないが、誠実なものです。

(49)És un poble on *hi van a estiuejar molts alemanys.
そこは、たくさんのドイツ人が夏の避暑に行く村だ。

(50)Vaig parlar amb el senyor a pui *li havien pres la cartera.
私は、財布をとられたその人と話した。

(51)Us explicaré l'actitud de la qual *en provenen tots els vostres problemes.
私は、君達の問題すべてが由来している君達の姿勢について説明しましょう。

それぞれの例文において、関係節を主節から独立した文にした時に必要となる要素を代名詞で置き換えてみると冗語的な代名詞がそれにあたることが理解できる。すなわち、(47)では、queにあたるla pel. lículaを受け、女性名詞の単数形をさす直接目的格代名詞la、この場合は次に来る助動詞hem

に縮約してl'hem、(48)では、en la qualにあたる要素en la meva actuacióを受ける代名詞hi、(49)でも同様に、onにあたるal pobleを受ける代名詞hi、(50)では、a quiにあたるal senyorを受け、男性名詞の単数形をさす間接目的格代名詞li、(51)では、de la qualにあたるde l'actitudを受ける代名詞en、といったようにそれぞれ現われていて、その出現がすべて予測可能な代名詞が繰り返されている。

これらの例では、関係詞が節導入の標識と機能を果たしているうえに、節内の文構成要素としても機能しているにもかかわらず、代名詞が繰り返されていることになる。ここでは節内の動詞の統語的な条件や意味などによって、代名詞の出現が要求されているようにはみえない。しかし、たとえばagradarのような間接目的格の代名詞がほぼ義務的に要求される構造では、(52)のように代名詞が現われる：

(52)És un noi que li agrada tot.
　彼は何でも好きな男の子だ。

この現象は、スペイン語でも認められるが、関係節内であるかどうかとは関係がないようにみえる。しかし、Solà(1984: p. 27)のように、このタイプではない動詞の時にも、代名詞を欠くことは「言語的直感からも抵抗を感じる」とさえ述べられているものもあり、関係詞の代名詞的機能を節内の弱形代名詞にのみ付与させる傾向が働いていると考えることはできると思う。また、次項でqueの誤用とされる用法を考察する際にもこの傾向を確認したい。

7．queの誤用と機能上の負担軽減について

7．1．queの誤用

前項で分析的な構造と呼んだ関係詞queの誤用とされる例をFabra(1937: p. 17)やCuenca(1992: pp. 105-107)からいくつか見ながらその解釈を考えてみる。まず、本来他の関係詞が用いられるべきところにqueがくる例を観察するが、各例文のb.が本来的とされる関係詞を用いた文である：

(53a)Ha vingut la noia que l'altre any li vas curar la cama.
(53b)Ha vingut la noia a la qual l'altre any vas curar la cama.
(a qui)
君が先年足を治してあげたあの女の子がやってきた。

(54a)M'han preguntat per un carrer que jo no n'he sentit a parlar mai.
(54b)M'han preguntat per un carrer del qual jo no he sentit a parlar mai.
注7)
人が話すのも聞いたことのない通りをたずねられた。

(55a)És un país que s'hi fa un vi molt bo.
(55b)És un país on es fa un vi molt bo.
(en el qual)
そこはとてもいいワインのできる国だ。

(56a)Avui he vist una dona que el seu fill viu a París.
(56b)Avui he vist una dona el fill de la qual viu a París.
今日、息子さんがパリに住んでいるある女性に会った。

(57a)Érem a la sala que les finestres donen a la plaça.
(57b)Érem a la sala les finestres de la qual donen a la plaça.
私達はその窓が広場に向いている部屋にいた。

(58a)M'ha parlat d'un alumne que jo no sé res d'ell.
(58b)M'ha parlat d'un alumne de qui jo no sé res.
その子について私は何も知らないある生徒のことを彼は話した。

例文(53)では先行詞la noiaが関係節内で間接目的になっているためにa la qualまたはa quiに相当するliが、(54)では先行詞un carrerが関係節内で動詞句parlar deの前置詞deに支配される前置詞句に相当するenが、(55)では先行詞un paísが関係節内でen el paísに相当する副詞的代名詞hiが、(56)では先行詞と関係節の間に所有の関係が成り立ち、関係節内でde la qualに相当するseuが、それぞれ現われている。しかし、(57)では(56)のような所有詞

が関係節に現われず、先行詞に対して照応する文構成要素がない。また、(58)では強形の代名詞resと前置詞による句に支配されるためun alumneを受ける代名詞の前置詞格ell(主格と同形)が現われている。

これらの例では、関係詞が節導入の標識の機能を果たしているものの、もうひとつの機能であるところの節内の文構成要素としては機能しているようには思われない。前項の冗語的な構造よりもさらに節内の代名詞にその機能を付与する傾向が強まっていると考えたい。次にもともとqueがあって、関係節内で代名詞が現われている例を見るが、(59)は(50)のa quiがqueになっている例である：

(59)Vaig parlar amb el senyor *que *li havien pres la cartera.

(60)Fa temps que no veig aquell gos que *el vèiem cada mati al parc.
毎朝公園で見ていたあの犬を見かけなくなってずいぶんになる。

例文(59)は、(50)よりもいわば機能の分化がさらに進んだ文で、(46a)と同じくqueが節導入の標識としてのみ機能しているといえる。(60)では、取り除けば規範的と考えられる文になるにもかかわらず必要のない直接目的格代名詞elが現われていて、分析的ではなく冗語的な構造であるといえるが、queの誤用としてここでとりあげることにするものの、やはりqueが節導入の標識としてのみ機能していることがわかる。

このqueの解釈については、Badia et al.(1997)、Cuenca(1991)、Solà(1984)のいずれにおいても、すでに関係詞ではなく接続詞であると解釈されていて、それについて異論はない。それは、関係詞の本来の持つ節導入の標識としての機能と節内の文構成要素としての機能のふたつのうち、前者を関係詞自身が受け持ち、後者の機能を弱形代名詞に付与することからも、「節導入の標識＝接続詞」の図式があてはまるからである。そして、これまで見てきた例に共通してある傾向、すなわちふたつの機能の分化または分散の理由としては、関係詞の「機能上の負担軽減」という考え方をもって説明してみたい。

7. 2. 機能上の負担軽減

これまで観察してきたように、関係詞の本来持つふたつの機能のうち関

係節内の文構成要素としての機能は、関係節内で代名詞が繰り返されることによって代名詞に付与され、関係詞自身がもうひとつの機能である節導入の標識という機能のみを果たすことになるのは、「機能負担を軽減させている」と解釈することが可能なのではないかというのがここでの提案である。これに関しては、Guiraud(1996)のように、広く理解されているようなラテン語の総合的な形式からロマンス語一般に見られる分析的な形式への発展と上述した関係詞の総合的な構造から分析的な構造への発展を結び付け、「総合的な構造から分析的なそれへ傾向」と説明しているものもあり、ひとつの解釈として大きな異論はない。確かに、関係詞の機能の分化はこの傾向に沿ったもののひとつであるということができるであろう。しかしながら次に見るように、例えば関係詞queが節内で主格として用いられている場合、この説明では説明しきれないものもあるように思われる。例文(61)(=(1))は、queが主格の場合である：

(61)L'home que ha vingut m'ha portat una lletra d'en Jordi.

この場合には、関係節内でl'homeを指す代名詞ellが繰り返されることはない。これは関係詞のある位置、つまり原則的に関係節の文頭に来るという規則が必然的にそれが関係節の主格の位置であることに一致しているからで、それによって関係詞の節内での文構成要素としての機能を果たしてしまっているからであると説明ができる。関係詞が主格の役割を果たしている文では、機能の分化が起こっていない、または起こる必要がない、という言い方もできるであろう。これは「総合的な構造から分析的なそれへの傾向」とは関係がなく、この考え方では上記例をうまく説明できないようにみえる。そこで、「機能上の負担軽減」という考え方を用いれば、関係詞が関係節の文頭という主格に無標な位置に来ることによってその機能を必然的に果たし、すでに機能の負担が軽減されているために、関係節内で代名詞を繰り返す必要がない、という説明ができるのである。

また、この考え方は、次の例(62)(=(34))のようなquinの誤用をも説明が可能である：

(62)És la casa quin propietari acaba de morir.

ここでは、規範的にはel propietari de la qualとしなければならないにもかかわらず、関係節の文頭をより明確にできるところに位置し、それによって機能上の負担を必然的に軽減させようとしている、と説明ができる。このように関係詞全体に機能上の負担軽減の傾向が働いていて、それがこれらの例で見たような口語レベルに特徴的であることは興味深い。

8.結び

以上、カタロニア語の関係詞について概観してきた。カタロニア語は隣接のスペイン語やフランス語と同じロマンス語に属することから、ラテン語からの発展の上での諸傾向を受け継いでいるといえる。しかし、これらの言語、なかでもスペイン語とは多くの類似点を共有していると同時に、細部では微妙に異なることが、本稿のように関係詞の用法だけをみても明らかである。その歴史的な経過からスペイン語の大きな影響下にあり、語彙のみならず形態・統語上の影響も大ではあるものの、ここで検討した機能上の負担の軽減などカタロニア語内部の問題と、類推形quinなどのようなスペイン語からの影響とを、より正確に検討し区別しなければならない。このように関係詞だけをとってみても単にスペイン語からの影響とは限らない様々な問題が提示されることをあらためて確認しておきたい。

[完]

注：

1)また、quinのかわりにqualを用いた例もみられることがある。

2)拙稿(1996)の例文(38)(39)にそれぞれ対応する。

3)また、現代語では使われなくなった形としてço queをあげることができるが、今回はどの関係詞も通時的な事象の考察は対象外とし、別の機会に論ずることとする。

4)古語では、quiは人にも物にも主格で用いることができた。現在の、人のみを先行詞とする用法はそのなごりである。cf. 拙稿(1996)、注5)。

5)Cuenca(1991), p. 104から引用。

6)例文(47)-(51)はBadia et al. (1997), p. 262から引用。
7)例文(54b)、(55b)、(57b)では関係詞quを用いることもできる。

参考文献(長谷川(1996)にあげたものは除く)

Badia, J. et al. (1996) *el LLIBRE DE LA LLENGUA CATALABNA per a escriure correctament el català*. Ed. Castellnou.
D'Introno, F. (1985) "Acerca de los universales del lenguaje y las cláusuras relativas." *Revista Española de Lingüística* 15. 1., 133-157.
Guiraud, P. (1966) "Le système du relatif en français populaire." *Languages* 3, 40-48.
Solà, J. (1984) *A l'entorn de la llengua*. Ed. Laia. 2ª. ed.
出口厚実(1997)スペイン語学入門。大学書林。
長谷川(1996)"カタロニア語の関係詞について(1)"、*Estudios Hispánicos* 21, 45-55. 大阪外国語大学スペイン・イスパノアメリカ研究室。